

新約聖書 ヨハネによる福音書 4章5節—42節 (新共同訳)

⁵それで、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に来られた。⁶そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。
⁷サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。⁸弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。⁹すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。¹⁰イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」¹¹女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。」¹²あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」¹³イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。¹⁴しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内へ泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」¹⁵女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」
¹⁶イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、¹⁷女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。「『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。¹⁸あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」¹⁹女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。²⁰わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」²¹イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。²²あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。²³しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。²⁴神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならぬ。」²⁵女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」²⁶イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」
²⁷ちょうどそのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた。しかし、「何か御用ですか」とか、「何をこの人と話しておられるのですか」と言う者はいなかった。²⁸女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。²⁹「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」³⁰人々は町を出て、イエスのもとへやって来た。
³¹その間に、弟子たちが「ラビ、食事をどうぞ」と勧めると、³²イエスは、「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と言われた。³³弟子たちは、「だれかが食べ物を持って来たのだろうか」と互いに言った。³⁴イエスは言われた。「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。³⁵あなたがたは、『刈り入れまでまだ四か月もある』と言っているではないか。わたしは言うておく。目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている。既に、³⁶刈り入れる人は報酬を受け、永遠の命に至る実を集めている。こうして、種を蒔く人も刈る人も、共に喜ぶのである。³⁷そこで、『一人が種を蒔き、別の人刈り入れる』ということわざのとおりになる。³⁸あなたがたが自分では労苦しなかったものを刈り入れるために、わたしはあなたがたを遣わした。他の人々が労苦し、あなたがたはその労苦の実りにあずかっている。」
³⁹さて、その町の多くのサマリア人は、「この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました」と証言した女の言葉によって、イエスを信じた。⁴⁰そこで、このサマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところにとどまるようにと頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された。⁴¹そして、更に多くの人々が、イエスの

言葉を聞いて信じた。⁴² 彼らは女に言った。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです。」

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「世の救い主」

旧約聖書のヨエル書2章12節にこう記されています。「主は言われる。『今こそ、心からわたしに立ち帰れ／断食し、泣き悲しんで。衣を裂くのではなく／お前たちの心を引き裂け。』あなたたちの神、主に立ち帰れ」。

神に立ち返るといって、穏やかで平安に満ちたイメージが浮かんでくるかもしれませんが。しかしここで言われているのは、神に立ち返るために、泣き悲しみながら衣を裂くのではなく、泣き悲しみながら心を引き裂けということです。「衣を裂くのではなく、心を引き裂け」とはどういうことでしょうか。それは、自分の表面的な思いや感情ではなく、これまで封じ込め、塗り込めてきた自分自身の最も深い部分にある心を引き裂き、露わにせよということなのだと思えます。

ドイツの神学者であるブルトマンはこう言います。「自分の本当の姿を知ることと、まことの神を知ることとは、同じプロセスの一部である」。

本日の福音書には、サマリアの町のヤコブの井戸のそばでの、イエスと一人のサマリア人の女性との対話が記されています。初めのうちはイエスに心を閉ざしていたサマリア人、すなわち異邦人の女性が、次第に心を開かれ、ついにイエスを信じて受け入れるプロセスが記されている箇所です。

私たち人間は、自分が本当に心から求めているものが何かということが、初めからはっきりしているわけではないでしょう。ですがそのような曖昧な私たち人間に、イエスの方からまず声をかけ、私たちとの関わりをお求めになります。私たちが、自分が何を真(しん)に求めているのかが分からず、暗闇の中を歩くときに、キリストの方から呼びかけて、私たちの真に求める心と呼び覚ましてくださるのです。

「イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた」とあります(6節)。この時、イエスは疲れていました。主イエス・キリストは、疲れを知らない超人的な存在として私たちの間を歩まれるわけではありません。主イエスは、弱さ・苦しみ・悲しみをもつ私たちと同じ人間の姿で、地上を歩まれたのです。

そしてイエスは、井戸に水をくみに来たサマリアの女性に、ご自分が飲むための水を求めました。イエスが女性に語りかけたこと自体、当時においては異例なことでした。当時の慣習として、男性が公の場で女性に声をかけるということは、作法に反した、周囲のひんしゆくを買うことだったのです。

しかも相手は、女性というだけでなく、ユダヤ人と敵対関係にあるサマリア人でした。ですからこの女性は、イエスに対して「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と、反発ともとれる返答をしたのです(9節)。

そんなサマリアの女性に、イエスは、女性に水を求めたご自身が、実は水を与える人であることを伝えます(10節)。相手に水を求めたイエスが、生きた水を相手に与える人だったのです(10節)。

当時の言葉使いにおいて、「生きた水」とは、流れる水、または大地から湧き出る水を指しています。ここでイエスは「生きた水」をもっと深い意味で、「永遠の命に至る水」という意味で語ります。ですが、サマリアの女性はその意味を悟ることができません。水をくむ容器を持っていないイエスが、いったいどうやって井戸の水をくむのだろうかと思ふに思ふ不思議に思ふのです(11節)。

しかしこの「生きた水」というイエスの言葉は、はっきりとは分からないながらも女性の心に一筋の光を呼び起こしたのです。イエスに対して初めは閉ざされていたサマリアの女性の心が、少しずつ開かれて、イエスに対する畏敬の念が次第に生じてきます。彼女の「主よ」というイエスに対する呼びかけの言葉は、女性の心の変化を表しています(11節)。しかしなお半信半疑で、「生きた水」とはいったい何を指すのか、戸惑いつつ、しかしイエスの言葉に惹きつけられていくのです。

ここでイエスは、自然的な物質としての水から、永遠の命に至る渴くことのない水へ、女性の目を向けさせます。水は、命のシンボルです。井戸からくむ、喉の渴きを潤す通常の飲み水を対話のきっかけとして、イエスが与える渴くことのない永遠の命に至る水へと、対話の内容は次第に深められていきます。

そして、イエスは突然「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言います(16節)。唐突な話題の変化に思えますが、これはイエスと女性の対話をさらに深めるために必要なことでした。サマリアの女性は、「わたしには夫はいません」と答えます(17節)。

女性のこの答えを、イエスは「まさにそのとおりだ」と言い、「あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない」と女性の現状を言い当てます(17-18節)。彼女に五人の夫がいたその理由は明かされていませんが、この時代(紀元後1世紀)、子供のいないまま夫が死ねば、夫の兄弟と結婚して跡継ぎを産むことが求められるレビラート婚の規定がありました。また、些細なことで夫から一方的に離婚を宣言されうる時代でもありました。

どんな理由であれ、五人の夫がいて、現在連れ添っている男は夫ではないということには、この女性が大変な苦勞を負って来たことがあらわされているでしょう。

詩編 139 編 4 節-5 節にはこう記されています。「わたしの舌がまだひと言も語らぬさきに／主よ、あなたはすべてを知っておられる。前からも後ろからもわたしを囲み／御手をわたしの上に置いてくださる」。

主イエスは、私たちの薄暗い過去、後悔に満ちた過去、これまでのすべての歩みを知り、私たちが抱えている問題、悩み、私たちが自分ですら気づいていない心の渴きさえもすべてご存じなのです。

また、この詩編 139 編の 1-2 節にはこうあります。「主よ、あなたはわたしを究め／わたしを知っておられる。座るのも立つのも知り／遠くからわたしの計らいを悟っておられる」。

今の時代、防犯のための監視カメラがあちらこちらに置かれています。他方、神の眼差しは、あなたを映し、捉え続けているカメラのようでありながら、監視カメラとは異なります。

監視カメラは、あなたの表面的な部分しか映しません。しかし、あなたを映し出す神の愛のカメラは、あなたの内側に至るまで、寸分も隠されるところなく愛をもって映し出してくださるのです。

私たちは、神の愛の眼差しの中に、自分のうちにある闇も光もすべて映し出され、知られていることを覚えながら、神にすべてを明け渡しましょう。

そして、神が私たちを愛の眼差しの中に見てくださるように、私たちも隣人を愛の眼差しで見つめ続けましょう。

私たちは生きていく上で、辛いこと、苦しいこと、すべてを投げ出したくなることもあるかもしれません。

しかしそんな時は、意識的にあなたの視線を上に向け、神様があなたに向けている愛の眼差しを見つめ返してみてください。

主イエス・キリストが私たちに与えてくださった生きた水が、私たちのうちで尽きることのない永遠の命の泉となるように、私たちは愛と希望と喜びのうちに、この地上での日々を歩んで行きましょう。

お祈りをいたします。

天の神様。あなたは、私たちが抱えているものの深さを知り、私たちが気づいていない私たち自身を照らし、生ける水の源としてくださいます。あなたの御手と眼差しに、私たちを委ねさせてください。御子イエス・キリストによって祈ります。アーメン

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 出エジプト記 17章1節—7節（新共同訳）

¹ 主の命令により、イスラエルの人々の共同体全体は、シンの荒れ野を出発し、旅程に従って進み、レフィディムに宿営したが、そこには民の飲み水がなかった。² 民がモーセと争い、「我々に飲み水を与えよ」と言うと、モーセは言った。「なぜ、わたしと争うのか。なぜ、主を試すのか。」³ しかし、民は喉が渴いてしかたないので、モーセに向かって不平を述べた。「なぜ、我々をエジプトから導き上ったのか。わたしも子供たちも、家畜までも渴きで殺すためなのか。」

⁴ モーセは主に、「わたしはこの民をどうすればよいのですか。彼らは今にも、わたしを石で打ち殺そうとしています」と叫ぶと、⁵ 主はモーセに言われた。「イスラエルの長老数名を伴い、民の前進め。また、ナイル川を打った杖を持って行くがよい。⁶ 見よ、わたしはホレブの岩の上でああなたの前に立つ。あなたはその岩を打て。そこから水が出て、民は飲むことができる。」

モーセは、イスラエルの長老たちの目の前でそのとおりにした。⁷ 彼は、その場所をマサ（試し）とメリバ（争い）と名付けた。イスラエルの人々が、「果たして、主は我々の間におられるのかどうか」と言って、モーセと争い、主を試したからである。

新約聖書 ローマの信徒への手紙 5章1節—11節（新共同訳）

¹ このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、² このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。

³ そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、⁴ 忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。⁵ 希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。⁶ 実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。⁷ 正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。⁸ しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。⁹ それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。¹⁰ 敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。¹¹ それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。

教会讃美歌 教会讃美歌 190 番「主のみ名によりて」、教会讃美歌 294 番「恵みふかきみ声もて」、教会讃美歌 365 番「愛なるみ神に」。